

選挙大干渉の政治史的考察（5）

春 田 国 男

A Consideration of "Senkyo-Daikanshō"
in the Context of Japanese Political History (5)

Kunio HARUTA

明治25年前後、日本全国の注目をなにより浴びた地は、南国高知である。続いては同じ南の九州佐賀であり、あるいは一転して裏日本の富山・石川といった地方であった。

現在の選挙なら各派の運動が最も激しいのは、東京や神奈川、大阪といった大都会であり、そこでの勝敗が、その後の国政の方向をおそらく決定することになる。それを思うと、明治の時代の第2回総選挙が、都会を遠く離れた地方で最も激しく戦われたというのは、当時の日本はまだ地方を中心とした国家であり、都会よりもむしろ農村に、政治的情熱が湧き上がっていたと推測できる。

がこのとき、高知や佐賀が壮烈な政戦の舞台となった理由は、実はもっと具体的な原因が存在していた。すなわち高知は、自由党の総帥板垣退助のお膝下であり、一方佐賀は改進黨の党首大隈重信の地元、また石川や富山といった北陸の土地もそれぞれ自由党や改進黨の幹部を送り出した県であった。このような、いわば民党のシンボルである選挙地を制圧することこそ、選挙に勝利した印象を国民に与え、これからの政局を有利に展開できる。政府がそう踏んだことこそ、最も大きな理由だったといえる。

1月29日、まず最初の大がかりな衝突が高

知で起こった。

高岡郡斗賀野村といえば、高知の街中から数キロ以上離れた、およそなんの変哲もない小村である。平坦部には広々と田が拡がり、周囲はそれほど高くもない山々がつらなって、日本中どこにでも見られる平凡な農村であった。もし仮に、明治25年のこの日の出来事が起こらなければ、歴史にその名を残すことはなかったと、まず自信を持って断言できる。

ところでこの斗賀野村は、当時は高知2区に属し、自由党の片岡健吉、林有造、政府派として国民党片岡直温、安岡雄吉が立候補していた。片岡健吉、林有造といえば、明治7年来の自由民権運動で、いずれも闘士として日本中にその名を知られた大物である。第一議会で、世にいう〈土佐派の裏切り〉として政府に妥協し自由党を脱党したが、その後まもなく復党して以前通りの有力幹部として活躍していた。一方の政府派候補の内では、片岡直温が昭和はじめ銀行パニックを引き起こした大蔵大臣として有名である。しかしこの直温にしても安岡にしても、自由党2人に比べれば、政治キャリア・知名度のいずれも問題外であり、まず順当であれば第1回選挙と同様、自由党の圧勝に終わるはずであった。

しかしこの25年、高知2区は大いに異なる様相を示しはじめた。それは前章までに見たとおり、このとき県・郡当局が、全力をあげて国



▲「明治25年高知県民使両党激戦の図」(香朝桜画)

高知県立歴史民俗資料館所蔵

民党候補の応援に動いたからである。県知事の調所広丈は高知の全区にわたって眼を光らせ、また高岡郡郡長の中摩速衛はその知事の意を忠実に実行して選挙干渉にらつ腕をふるった。彼は選挙直前にわざわざこの高岡郡に送りこまれた人物であり、このときおよそ行政官らしからぬ〈鬼警部〉の異名をすぐにもらった人間である。のち密かに投票箱を焼き捨てるというすさまじい行為にまで走るが、その出来事はいずれ紹介しよう。

こうした背景のもと、この高知2区では民党・吏党の双方の面子をかけた激しい選挙戦が繰り広げられた。自由党の運動員は赤タスキ、国民党側は白タスキをつけてそれぞれの眼印とし、彼らは道で行き会うごとに小競り合いを起こした。意気高らかなと形容したいところだが、彼らがカブトがわりに頭に乘せたのは、なんと馬沓であった。

さて話を明治25年1月29日早暁にもどす。このとき斗賀野村の村長宅には自由党員二十数名が、またそこからかれこれ200メートル離れた人家の周囲には国民党の党員百数十名が、互いに息をひそめてにらみあっていた。この国民党の数の中には、高知からの応援の警官隊四十数名が含まれ、反対に村長宅周囲の林や田のあぜ道には、自由党を応援するため、6、70人の

村民たちが早くから待機していた。

このような緊迫した状況が、なぜ生まれたかはあきらかではない。しかし郡長の中摩速衛は、「抵抗する奴は抜刀して容赦なく斬れ！」と警官隊に命令を下していたというから、斗賀野での両派の対立はすでに発火点に達していたといえよう。

やがてわずかに時が過ぎ、双方のちょうど中間あたりに位置した虚空蔵山から、夜闇を押しよけるように太陽が顔をのぞかせはじめた。場面がいかにも出来過ぎの感じだが、これは歴史的な事実である。ともかくこの一瞬を待ちかねたかのように、国民党・警官隊の合同隊百数十名、それにこの直前に駆けつけた応援の警官隊120名の合わせて300人近くの間人たちが、日の丸の旗を掲げた警部たちの号令を合図に、いっせいに村長宅に向かって攻撃を開始した。「剣戟の光日に映じ呐喊の声地を揺かせり」(明25・2・3「読売」とはこのときの模様を描写した新聞記事である。彼らが抜き放った刀は、朝日を受けてキラキラと輝き、いっせいにときをあげて攻め寄せていく姿は、南国高知では話でしか知ることのない、まるで雪山の雪崩のようであったという。

一方自由党側でも手をこまねてはいない。敵の攻撃開始と同時に、こちらも3発の銃声を

響かせ、それを合図に村長宅といわず、林の中からといわず、あるいは田のあぜ道といわず、それまで身を伏せていた全員がいっせいに立ち上がって、応戦に走り出た。

左図はこのときの様子を錦絵にしたのもである。これを見れば、この日の戦いは、〈合戦〉という形容がやはりぴったりであり、明治25年という時間はしばらく私たちの脳裏からは消えていくであろう。

この日、国民党側の一番手になったのは、力士の鎮台松という人物である。彼は、やはり自由党側の一番手となった西田楠吉とわたりあい、頭部に一太刀を浴びその場に倒れた。西田楠吉はこのときまだ24才の若者である。鎮台松を倒した楠吉は、勢いのままさらに背後の佐川警察分署の署長、井上作郎に激しく迫った。が、周囲からいっせいに斬りつけられ、四十数ヶ所の傷を受けて彼もまた倒れた。この西田青年に続いた自由党员、山崎卯子と前野辰吉の2人も何ヶ所も傷を受け、彼らはその場で絶命した。なお、西田楠吉は深手こそ負ったものの一命を取り止め、その後84才まで生きて「土佐の生きた憲政」と人々から崇められた。してみれば、彼のこのときの負傷は、実に〈名誉の負傷〉だったことになる。また、彼が倒した相撲取りの鎮台松のほうも、重傷にとどまったという。

「斗賀野戦争」として歴史にその名を残した戦闘で、死傷者となったのはこれだけの人々である。戦いに参加した人数が400名近かったことを思えば、実際の死傷者がこれだけなんですとは、なんとも奇妙である。しかし、彼らは幸いにもその名を残すことができた人間たちであり、口碑によれば、この日の戦いでは戸板やムシロの担架に乗せられて負傷者が次々と運ばれたというから、おそらく犠牲者はもっと多かったのであろう。

ともあれ戦闘は一進一退を続け、空中には鉄砲の弾と大小の石つぶてが飛びかい、地上では刀やこん棒をふるっての戦いが繰り返された。その間の時間は、30分とも1時間とも伝えられている。しかしやがて、生命をかけて双方の

間に割って入りこむ人間たちが出現したこと、また戦闘のあまりのすさまじさに戦士たちにもいつしか臆気が走ったためか、まず国民党軍が目立って後退りをはじめ、この暁の大合戦もようやく終わりを告げた。

さてつぎに並べたのは、この戦闘の証拠物件として、高知裁判所の検事局が押収した品物である。

短刀1本、刀14本、長脇差11本、小刀合口6本、仕込刀3本、棒鞘刀1本、鉄棒1本、ステッキ5本、銃2挺、6連発弾丸23個、雷管11個、小雷管125個、鋏の柄36本、竹槍27本、銃剣1本、刀鞘2本、白旗章1流、黒山高帽子1個、灰塊2包、鳶口1個、火薬入1個

黒の山高帽子やステッキが、刀や竹槍とまじって残っていたあたりは、合戦という大時代な雰囲気の中にも、やはり文明開化の匂いが漂ってなんとも興味深い。それにしても、手近にある武器は手当たり次第に使われており、素朴といえまことに素朴な戦闘であった。

結局この日の戦いは、自由党、国民党のいずれが勝利したかはあいまいなままであったが、選挙戦はじまって以来の大きかりな武力衝突として、たちまち全国に衝撃を与えた。またそれと同時に、この高知での選挙運動がさらに過熱して、殺気がいつそうみなぎる状況となったのは当然の結果である。なお、斗賀野のニュースを知った熊本の国権党は、ただちに高知の国民党本部あてに、次のような激励電報を送った—「激戦中なりと聞く。壮絶快絶勇進奮闘、賊をして遺棄なからしめよ」。「遺棄なからしめよ」とは、「コテンパンにやっつける!」といった意味である。

斗賀野の出来事からおよそ1週間後、日本中を驚愕させるような事件が、またもや高知発として報道された。次は、「南海の怒涛」という見出しのもとにその出来事を報じた「国民」新聞の記事である。また舞台となった幡多郡は、斗賀野村同様、やはり高知2区に属する土地であった。

○国民派の壮士汽船を砲撃す 去る五日自

由派の壮士四十は汽船に乗りて幡多郡中村町に向ける。此中村こそ国民派の根拠と頼む所なれば同派の壮士等は早くも之を聞きつけ、屈強なる者ども二百人をスグリて之を銃隊に組み、同郡佐賀村に詰めかけて自由派の着船を今や遅しと待ち受けたり。斯くとは知らず自由派の壮士等は先づ須崎という所に至りて、更に六十人の同志と合し、総員一百人再び汽船に打乗りて佐賀村に着きしに、国民派は待ち儲けたることなればスハと云ふさま直ちに鉄砲の火蓋をキッて放ちけり。不意を打たれてナジカはたまらん、自由派は早々船をめぐらして下田港まで引返せしは午後七時頃なりしが、茲にも亦、三百余名の国民派ありて、肩を怒らし腕を擦り、寄らば打たんと身構へたり。自由派の船中に乗り合はしたる憲兵は目早く之を認めて、アナ夥し、茲へ上陸せば如何なる奇劇を演出せんも計られず、唯速やかに須崎村へ引返すべしと説きたれば、一船悉く之に応じ遂に須崎に引返しける。此日国民派の壮士四百余名は全く討死の覚悟にて、父母兄弟と訣別の盃をなし、銃を肩にし刀を腰にしいきみ立てぞ門出しけると。

(明25・2・9「国民」新聞)

国民党側のだれもが、銃を持っていたわけではあるまい。しかしそれにしても、実際に100丁ほどの銃が、相手方の乗った汽船めがけていつせいに火を噴いたのであるから、これまた〈戦争〉と呼ぶほかなかった。人々の意気ごみからして、「父母兄弟と訣別の盃をなし」てその場に臨んでいたというから、もはや選挙はそっちのけで、憎しみと敵意だけがかぎりなく増幅されていたと想像できる。

ところでこの記事の中で特に眼を引くのは、自由党側を説得して大規模な衝突を回避する役割を果たした憲兵の存在である。彼らは、29日の斗賀野戦争を受け急拠大阪から派遣された人々であり、この後2月15日の投票日まで、前後3回にわたっておよそ100名の憲兵たちが高知に送りこまれた。県や郡の行政当局や警察機構が、それこそ全力をあげて国民派の陣頭に

立ったこの時期、一体だれが、この憲兵隊の出動を要請したのであろうか？

これについては、次のような推測が当時の新聞に見られる。

○憲兵の出張は検事の請求なり 高知県へ
憲兵の出張したるは、県庁の請求にあらずして検事の請求に基けるものゆえ、出張後も万事検事とのみ協議し、進退する処ありと通信あり。事実にあらず。

(明25・2・9「読売」新聞)

憲兵隊の登場が、とりわけ国民党側の動きを牽制する効果があったのは、確かなことであつた。なにしろこの幡多郡の海戦当日には、巡査が村々をまわり、「自由党が200人ほど船でやってくる。かれらは国賊であり、朝敵であるから15才以上の男子はかならず獲物を持って出よ」と触れまわったという話が残つたように、官憲すなわち国民派であつた。したがって、自分たちの行動にブレーキがかかるような憲兵隊の出現は彼らにとって好ましいはずはない。案の定、「大阪憲兵一分隊は高知に着けり。之れが出迎をなしたものは、検事局書記のみにして、県官は一名も出迎はざりき」(「選挙実録」という有り様であつた。

しかし、たとえ憲兵隊が出動してきたとはいえ、一度火のついた衝突は簡単に治まるはずはなかつた。大がかりな武力衝突は、斗賀野と幡多郡以来、さすがに鳴りをひそめたものの、中小の騒動はそれこそかぎりなく勃発した。

夜中の押しこみ、家人の殺傷、家の焼き打ちや破壊。相手方の有力者と見れば白昼でも斬りかかり、たとえ警察署に逃げこもうと後を追つてなだれこむ。そしてその警察が、大ていは見つて見ぬふりをしたというから、この時期の高知はまったく無法の世界が出現した。また一般の商家にしても、両派の衝突が予測されたときはあらかじめ店じまいをして、いつでも逃げられるように身支度を整えた。「全く戦争の始らんとするが如く」(明25・2・9「読売」)と新聞もこの高知の様子を報道したように、人々は生きた心地もしないという状況となつた。

次の記事は、ある雑誌が記録した、当時の高

知の雰囲気である。

◎高知県下に於る議員総選挙に就き、競争の最も激烈なるは第二区にして、選挙日の切迫するに従ひ、自由国民両派争闘の末負傷者も多くあるべしと、赤十字社員は治療のため第二区に向て出発せり。又た基督教徒婦人は率先して双方の看護を取らんとて充分準備をなし何時にても出張せんと意気込み居りしが、憲兵選挙地に於る両派の壮士に解散を命じければ、今は赤十字社員、基督教徒婦人の用意は画餅に帰せりと雖も、県下の為めには大に幸福にてありき。

(女学雑誌三〇六号「高知県通信」)

この記事のように、憲兵が出てきたからといって、すべてが丸く治まり高知の人々が突然幸福になったというわけではない。投票日の15日さらにその後の出来事と衝突はますますエスカレートしていくが、それは次章で見ていこう。

二

民党と政府派のすさまじい選挙戦は、なにも高知だけではない。改進黨の領袖大隈重信の出身地である佐賀県においても、〈血の雨〉という点では、決して高知には負けなかった。当時、佐賀県下は3区に分けられ、なかでも激戦と見なされたのは改進黨幹部武富時敏、自由党幹部松田正久が立った佐賀1区であった。2人の指定席と見られたこの民党の有力地盤に、政府はあえて候補者2名を出馬させた。

明治政府がいかにも力を入れたかは、公示の直前になって佐賀郡長を更迭し、しかも新しい郡長に六角耕雲という人物を任命したことである。それまで広島県典獄すなわち監獄署長という経歴の人間を、選挙直前に県行政のトップにすえるというこの人事は、あきらかに政府の意図を示すものであった。なお佐賀では、当時神崎郡の郡長にも前職が警部という人物が赴任しており、この六角氏の任命は、政府の打倒民党というねらいを露骨にあらわした人事であった。

ではこの六角耕雲は、具体的にどのような選

挙観の持ち主であったろうか？ 次の手紙は、彼が「栄陽倶楽部」という政府党本部の書記あてに出したものであり、内容から見ておそらく2月10日前後に投函されたと推測できる。

「最早投票日モ切迫、当地方ニモ互ニ一層ノ熱度ヲ高メ必死ノ場合ニ御座候。然シ我兵勢ハ日々盛ナル方ニテ新北村ノ如キモ過半以上食込ミ、日一日ト敵兵ヲ排シ好結果ニ相赴キ申候。(後略)。

六角郡長
末永書記殿

「我兵勢」「敵兵」といった言葉が遠慮なく登場しているのも、手紙の体裁が親展となっているためであり、彼の張り切りぶりを示すのになんの差し支えもなかったからであろう。

郡長がこうであれば、そのコンビたる警察署長も当然ハッスルせざるをえない。佐賀警察の署長宮本専一も、このころ部下に向けて次のような命令を下した。

「如此秘密会ヲ開カシムルトキハ、是迄警察官ガ盡カモ遂ニ水泡ニ属スル義ニ付、毫モ仮借スル所ナク法律ノ範囲内ニ於テ嚴然タル処置ヲ執行シ、彼等ヲシテ運動ノ余地ナカラシムル様致シ度見込ニ付、各位其旨ヲ領シ、此際十分緻密ノ視察ヲ為シ、仮令隱微ノ会合ト雖モ予メ其計画ノ始末ヲ探知シ得タル分飛報セラルベシ。

明治二十五年二月四日

佐賀警察署長 警部 宮本専一

文中の「彼等」は、もちろん民党の勢力を指したものである。「彼等ヲシテ運動ノ余地ナカラシムル様」とは、実に率直に選挙干渉を指示しており、いかにもこの当時の佐賀の状況を示した言葉であった。

では実際、佐賀ではどのように選挙戦が進んだかといえ、まず600人あまりの博徒、無頼漢が政府党本部と警察署に雇われた。彼らの日当が正確にいくらだったかは、さすがに史料にも残っていない。だが選挙後、日当の未払い分を求めて彼らが警察署に押し寄せたという話は歴史に記録されている。

しかしともかく、なにがしかの金銭と武器と

なる刀剣を受けとり、頭を白布で包んで彼らは出陣した。1隊20名、先頭にはそれぞれ2名の巡査が立っていた。彼らは町中で有権者に出会うと、まず政府派への投票を強要し、脈がないと見るや、たちまち数人がかりでその人間を川中へ投げこんだ。さらに適当な民家に押し入り、酒食を求め断られると、その家の家具から家屋全体に至るまで手当たり次第に破壊し、あげくは火をつけて立ち去った。また、警戒の手薄な民党の事務所に乱入、運動員に死傷を負わせるという無法を繰り返した。巡査が先に立っての乱暴であったため、だれも手がつけられなかったのはいうまでもない。それどころか、小城町という地区では、その巡査が真っ先に白刃をふるって町民に斬りつけるという騒ぎにまでなった。当時、この町内では政府派の攻撃を警戒して徹夜の張り番をしていたが、暗闇から突然警官2名から襲われた。次はその事件の、告訴状の一部である。

右被告ノ者外三名ハ物蔭ニ潜ミ居タルモノト相見エ、突然抜刀シ馳セ来リ、之ニ続イテ悪漢十五名同シク抜刀ニテ斬リ掛リ、不意ノコトノミナラス、平服ヲ著ケタル巡査ナレバ皆々大ニ驚怖シ逃出シタルニ（後略）。

暗闇から襲ってきた人間が巡査と知れば、小城町民でなくとも大変な恐怖だったにちがいない。おそらくこの地域は、民党の強力な地盤と見られ、このような手段を選ばぬ攻撃となったのであろう。

ところでこうした出来事を見れば、佐賀での衝突は、先の高知とはいくぶん様子のちがっていたことがわかる。すなわち高知のように、互いの運動員たちが過熱したあまりの騒動ではなく、この佐賀は、警察官や郡吏が積極的に乗り出したために、被害がいつそう広がったものであった。「唯怪むべきは、佐賀県の競争は他の諸県の如く政党と政党の争にあらずして、実に民党と警官及び郡県吏との争なりし事、是也」（「選挙実録」）との指摘は、それを言ったものである。また、第三議会では立川雲平が佐賀の選挙干渉を取り上げ、これは「行政官と民党との争い」だと声を高くした。事実を見れば、小

城の出来事のようにむしろ一方的に官側が挑発し、一方的に攻撃したケースがほとんどである。

ではこうした、あきらかに不法・無法な命令を受けて、自己の良心との矛盾を感じるといった警察官が、この当時の佐賀には、ひとりもいなかったのであろうか？ 実は貴重にも、ただひとりいた。藤津郡巡査部長永野正直がそれである。名前からしてそれにふさわしいこの人物は、署長の度重なる干渉命令を拒否し、自宅に立ちもどってそのまま喉を洋刀で突いて自殺した。彼の息を引き取る前の言葉は、

「選挙運動は宜しく公明正なるべし。豈警官の如き、身、官に衣食するものの干渉すべき所ならんや。而るに今や此の如し。これ国家の凶兆にして、官民軋轢の本なるのみ。余は膝を五斗米に屈すと雖も、復た此等の事をなすに忍びず」であったという。

だが現実には、彼のまっとうな信念などまるで問題外の、官側のすべての組織を動員した干渉が佐賀では展開された。そしてやがて2月15日、1000人以上の民衆が警察署を取り囲むといった大騒動へと発展する。

三

高知・佐賀とともに、この時期日本中の注目を集めたのは、石川県からのニュースである。この石川も、政争の激しさでは先の2県に劣らない土地柄であり、すでに1月半ば、最も対立がきびしかった石川郡郡長に金沢警察署の署長が任命されたのも、佐賀と同じ経過であった。

1月27日の昼頃、なんとも奇怪な、それでいてどこことなくユーモラスな事件が石川1区で起こった。被害者は民党の候補者、松田吉三郎である。この日彼は、支援者2人とともに町の銭湯に出かけた。これが銭湯ではなく、どこか温泉だという別の報道もある。がそれはともかく、選挙の候補者が真っ昼間から湯に入っていたのはのんきな話であり、無用心でもあった。はたして反対派の人間たちはこのチャンスをとらえ、銭湯に忍びこみ湯つぼの候補者を襲撃し

た。この結果、候補者は頭・背中に重傷、また連れの人々もそれぞれ負傷した。

続いて2月はじめ、候補者が襲われるという事件がまたもや起こる。

○刺客浅野前代議士に迫る 一昨日石川県下の壮士飯田某外十数名は、金沢浅野川小松軒に於て、民党有志者の開きたる懇親会場に乱入し、火鉢を抛ち、杖刀を抜き放ちて民党の候補者浅野順平氏に飛びかかり、頭髪をつかみて将に斬らんと身構へたるを、民党の壮士之を遮り、浅野氏は間髪を容れざるの場合に一命を全うして逃れたりしと。尤も其跡にて民吏両党の壮士は奮闘したりとのことなり。

(明25・2・7「読売」新聞)

たしかに候補者が負傷したり死亡したとすれば、相手方には大打撃であり、選挙は一気に反対派有利に進む。しかしそれにしても、なんと手荒な、短絡的な干渉の方法であった。

また一方、吏党の壮士たちと一般の村民たちがぶつかるという出来事も、この石川で起こった。2月9日、石川郡長奥村の事件である。

○石川郡長奥村へ国民派の壮士二十余名、抜刀して乱入し人民を圧迫せり。昨夜国民派の壮士二十余名、石川郡マチ村へ抜刀にて乱入し選挙民を脅迫したれば、村民七百余名は太鼓を鳴して之を追い払ふ。壮士は狼狽して巡査駐在所に逃げ込み、ために駐在所は破壊せられたり。

(明25・2・14「朝野」新聞)

駐在所が破壊されたというのも、壮士らの引き渡しを警察側が力づくで拒んだためであった。

2月12日、同じ石川郡の館畑村に、やはり数十名の政府派壮士が抜刀の上、村に斬りこんだ。このときも700名あまりの村人たちが太鼓を鳴らして集まり、壮士を応援する警官隊との戦いとなった。わかっているだけで、警官の負傷者4名、村民3名が出たという。

さらにこの館畑のニュースが報道されると、民党側は金沢より応援部隊が出発、また警察の方でも急拠50名が館畑に向かった。高知同様、

愛知憲兵隊が出動したというニュースを報じた新聞もあったが、実際に介入した様子はない。ただほかの土地とはちがひ、石川県の選挙戦では一般の人々が主役となって政府派の運動員たちに立ち向かったのが特色であった。先の二つの事件とも、集結した村人の数がそろって700余名という多さであり、彼らは抜刀の壮士相手に草刈り鎌や竹槍で戦った。

ところでこの時期、政府が新しい選挙干渉ともいえる手段を、この石川で取った。次はそれを報道した「朝野」の記事である。

去る六日、石川県下発行の北陸新報第七百三十八号特別広告欄内に、自由党総理板垣退助、改進黨代議士会長大隈重信の名を以て、自由改進黨連合民党の大主義に依り松田吉三郎外四名を衆議院議員候補者たることを是認すとの旨を広告したるは、板垣大隈の両首領が其の率ふる所の自由改進黨両党を代表し、即ち両政社相連結して民党の候補者を推薦したること確実なれば、即ち集会及政社法第二十八条の違反者と認め、新聞検閲以上の犯罪あることを認知したるより、警保局保安課長山田幹氏は、板垣大隈両伯及び自由党幹事石塚重平(中略)の諸氏を被告として、本日東京地方裁判所に告発したりといふ。

(明25・2・10「朝野」新聞)

それより1日早い「毎日」には、内容はまったく同様の、自由党・改進黨が石川の候補者をそろって〈民党候補者〉として押しだした旨の広告も掲載された。こうした広告が、集会及政社法に触れると政府は判断し、両党の関係者三十五名がこのあと告発されるという大事件にまで発展する。

政党政治が発達したいまなら、このように2党が選挙協力のシフトをしたいからといって、なにも法に触れるわけではない。しかし当時の法律は、「政社ハ委員若クハ文書ヲ発シテ公示ヲ誘導シ又ハ支社ヲ置キ若クハ他ノ政社ト連結通信スルコトヲ得ズ」(集会及政社法28条)と規定し、違反すれば政党の委員・役員は最高1年の禁錮刑が科された。石川の場合は、この規定がはじめて適用された出来事であった。

だが内務省としても、いまでは爵位さえ有した板垣や大隈相手ではさすがに荷が重かつたらしく、この一件はやがて免訴というあっけない幕切れとなった。しかしそれも選挙が終わったあとの出来事であり、干渉の手段としてはかなりの打撃を民党側に与えることはできた。

同じ北陸地方の激戦地として、富山県でもこの時期いろいろな騒動が勃発した。

仕掛ける側はやはり政府派候補者のお雇い壮士であり、攻撃されたのは民党の運動員や支援者である。が、この富山では他県では見られない、練り上げられた戦術が特色であった。次の史料は、「選挙実録」が暴露した、富山県砺波郡のこのときの〈干渉心得〉である。

- 一 民党の集会演説会は、総て○官に於て解散すべき事
- 一 決死隊三十名を集る事。但遺族の扶助料を定む
- 一 区内及隣郡より車夫及其他破落戸を雇ひ、壮士と共に民党方の選挙通行の途上に妨害乱暴する事
- 一 民党候補者は目付け次第に要撃する事
- 一 各部落毎に親睦会を開く事。但し此地方は仏教地なれば、先づ人心を激昂せしむるの手段として、改進黨の大隈伯は今度カトリック教徒より運動費を取出して民党の運動に供すとのことを吹聴し、一般愚民を激昂せしむる事

遺族の世話まで考慮した決死隊の募集も興味深いが、なにより眼を引くのは、やはり最後の項目である。この戦術のヒントは第4章で見た、カトリック教会から民党に選挙資金がまわったという例のデマだが、実際それが干渉に使われニュースとなったのは、この富山のケースが最初であった。2月3日、富山4区でのことである。

○島田孝之氏被傷の始末 富山県第四区の候補者島田孝之氏が、去る三日仏教信者のために殴打せられたる始末を記さんに、同氏は同日午前九時頃砺波郡出町の宿所某方を出で洗湯に行かんとて石鹼を片手に持ち

往来に出づる途端、向ふよりチョン鬚頭の男と僧侶らしき男と来り、同氏と摺れ違ふとき、しばしとて同氏を呼び止め、扱て十二の話しに移りしが、やがて僧侶らしき男曰く、貴殿は今般大隈伯が邪蘇教某より借入れたる金の内七百円を貰ひ来り運動なし居るよし、果して然らば当選の暁には仏教を廃止し邪蘇教を保護せらるる積りなるや如何と問ひ掛したらば、島田氏は左様なこと少しもなしと答へけるに、チョン鬚男は、ナニ左様なことがないとは虚言だ、貴様は仏敵に違ひない、生して置くべからずと理不盡にも打かかり、僧侶らしき男も亦同様擲ち掛りて双方より無二無三に乱打しければ、島田氏如何で之を支へ得べき、遂に其場に打ち倒れたるを、両人は尚も続けざまに擲ち何処ともなく逃げ去りたりと。

(明25・2・7「読売」新聞)

候補者の負傷はさいわい軽くてすんだが、このあと彼は危篤のデマを流され、遂に落選の憂き目にあつた。石川の場合と同様、うかつに銭湯に出かけたことが命取りになったようである。

最後に関西はどうだったろうか？

これまた選挙戦は激烈をきわめ、各地から血なまぐさい報道が伝えられた。尾崎行雄が立った三重県、犬養毅の岡山県、あるいは京都、兵庫、大阪とそれぞれ民党と政府側がぶつかりあつた。

とりわけ大井憲太郎、東尾平八郎といった自由党幹部が立候補した大阪6・7区では、政府派の攻撃が集中した。1月29日、大井憲太郎が政談演説を終え演壇を下りようとしたとき、股引き・半てんの職人スタイルの団がいきなり立ち上がり、大井めがけて殺到した。そして同時に、今度は場外からもこん棒、杖刀、木刀、槍、鎌とあらゆる武器を手にした壮士グループが、会場になだれこんだ。応戦した自由党側に数名の負傷者が出たが、大井憲太郎は人垣に守られかろうじて脱出した。

翌1月30日、大阪7区の東尾平八郎がねら

われた。

日河内国丹北郡天奥村に開きたる東尾派の演説会は、予て会場に竹柵を結び乱暴人の乱入を拒ぎけるが、東尾氏の演説始まるや否や、一人の壮士大刀を掲げて跳び入り、引き続いて45名の暴漢一斉に跳び入り、引き続いて四百五十名の暴漢一斉に襲ひ来り、手に手に大槌を把て竹柵を打ち壊して乱入せしにぞ。スワ大事よと五百六十の聴衆騒ぎ立つるを、警官が非常の盡力にて漸く取り鎮めたり。

(明25・2・3「読売」新聞)

最初から竹柵で囲んだ演説会の光景は、なんとも異様である。しかし実際、そこに大刀片手の襲撃者が飛びこんできたとなると、これはもう時代劇の世界であった。

このような襲撃が効を奏したものか、有力視された大井と東尾はいずれも落選。大阪府では代議士10名の内、9人までが政府派という結果が生まれた。「選挙区民の一半は権と威とに迫られて其の意を枉げ、他の一半は美酒に酔ひ、佳肴に眩し、酔溺の中金によって其の意を売れり」とは、この大阪の結果を指して、「選挙実録」の作者が嘆いた言葉である。

四

以上が2月15日の投票日を前にした、地方の干渉事件である。高知を除いては、それほど大がかりな戦闘こそ起こらなかったが、それでも白刃が躍り、竹槍や杖刀が多くの人間たちによって振りまわされた。あるときは演説会場が、民党本部や支援者の自宅が、また町中の道路や田のあぜ道がその活劇の舞台に選ばれた。不幸にも被害者となったのは、運動員はもちろん、候補者や有権者まで含まれ、いつ生命の危険にあうかわからないという緊迫した雰囲気次第に高まっていた。

では、東京や関東の地方はどうだったかといえば、実はそれほど暴力沙汰や殺傷のニュースは見られない。もちろん選挙戦の激しさや政争のきびしさは他と同じであったが、それでも大がかりに憲兵隊が出動するような騒ぎは、つい

にこうした地域では生まれなかった。理由のひとつには、民党の地盤は高知や佐賀といった地方であり、東京あたりでは政府がそれほど強力に干渉する必要性を感じなかったからであろう。しかしそれでも、小さな衝突や干渉事件は日常的に生じ、民党の候補者たちもやはりそれぞれにガードを固めて、投票日に備える必要があった。

ところで投票日直前の2月14日、東京の各紙に東京3区の民党候補中沢彦吉は決して立候補を止めたわけではない、という何とも奇妙な広告が掲載された。土壇場になって、自分は依然として候補者であると、必死で叫ばねばならなかったのであるから、怪聞の威力は相当だったにちがいない。

それでもまだ「死んだ」というデマでなかっただけ、中沢彦吉はさいわいである。2月14日、今度はずばり候補者は死んだというデマを流され、それに必死で対抗する広告が「郵便報知」に登場した。

「時下衆議院議員選挙競争激烈時日モ切迫ノ際ニ当リ、何者トモ知レズ多分反对者ノ窮策トハ存候得共、去ル十二日発ノ葉書ヲ以テ、拙父良則死去ノ報ヲ我千葉第二区該有志家ニ差出候事承知仕、実ニ失笑ノ至リニ堪ヘズ、之レ全ク無根ノ事実ニ御座候間、左様御承引被下度第二区諸君ニ向テ願上候。

千葉県第二区 東京神田美土代町二丁目
一番地

良則長男 小倉武之助

(明25・2・14「郵便報知」)

死亡したとされたのは、千葉2区の自由党候補者小倉良則であり、彼の家族がわざわざこうした「無事広告」を出したのも、候補者が立派に生きていると有権者にアピールするためであった。

しかしこうしたニュースを見れば、選挙戦もほぼ大詰めにきていたと判断できる。候補者死亡や重体といった作戦は、暴力で相手方をねじ伏せる手段とは異なり、最後の土壇場で有権者の心理を混乱させることを意図した、実に巧妙な方法であり、ここまでくると選挙干渉や妨害

も出つくした感があった。

一方、このころプレッシャーを受けていたのはなにもこうした両派の関係者ばかりではない。国民のわずか1パーセントにあたる有権者たちも、有形無形の圧力を受け、投票日が迫れば迫るほど緊張感を増していた。次は東京でのそうした様子を報道したニュースである。

○第一区の棄権者 一昨夜より昨朝にかけて、麴町区内にて俄に田舎の親類に病人が出来、或は俄に持病差起りなどとて棄権の支度を初めたるもの拾余名あり。此按梅にては当日迄に猶棄権者増加すべく（後略）。

（明25・2・14「国民」新聞）

せつかくの貴重な選挙権も、こうした見え見えの口実で放棄せざるをえない人々が出たと同時に、自派にはあきらかに投票しないと予測できる有権者に対しては、力づくで棄権をさせる方法も多く取られた。「令棄権後略」とわざわざ名づけられた手段も、東京では広く見られたと新聞は伝えている。

また、このような干渉に負けた結果、投票を約束する有権者も数多く生まれた。7日付けの「国民」の記事である。

◎群馬県第四区 の選挙権利数は一千五百点に過ぎざるにも拘はらず、被選挙人とのお約束によれば尠くも四千以上の投票数に昇り居れりと云ふ。奇と云ふべし。

〈奇〉であろうとなかろうと、圧力を受けてその場かぎりの約束をしなければならなかったのが、このときの有権者たちの状況であった。運動する側も必死なら、一般の有権者たちも同じように混乱の渦の中にいる姿が、こうした新聞のニュースから浮かびあがってくる。

投票日直前の、日本全国での主だった動きは以上のとおりである。1月1日の公示から1ヶ月あまり、解散から数えるとすでに50日がたとうとしていた。なおこの期におよんでも、また新しく候補者が打って出たというニュースが2月14日の各新聞にいくつも登場するが、これなどは混乱の駄目押しといったところであり、投票日さえくればもはやすべては終わる。

多くの人々は、もしかしてそう考えていたにちがいない。

だがしかし、〈世界無比の選挙競争〉のクライマックスはいよいよこれからであった。最後の大騒動が、15日の投票日、さらに当選者が確定したそれ以後の日々に、実は待ち構えていたのである。

ただそれでも、すでに選挙は勝利したと楽観的な気分で投票前夜を迎えた人間たちもいた。次は、東京での政府派の圧勝を確信した、警視總監の姿である。

園田警視總監は一昨日警視庁に於て臨時署長会議を開き、各署長より臨時総選挙の報告を聞き取りたる上種々協議せしが、最早大勢もほぼ定まりたるとかにて、散会后直に品川大臣を官邸に訪ひ具さに府下各選挙区の模様を進達したる趣なり。

（明25・2・14「国民」新聞）

政府関係者が勝利を確信して、いかにゆったりした気分で15日を迎えたかは、次章でも見ていこう。

だがとうていそのような気分にはなれず、明日の投票日こそ最も重要な決戦の日と、この夜眠れぬままに時間をすごす人間たちが全国に数多く存在した。ある者は、暴行や脅迫がエスカレートして明日は殺傷沙汰になろうとかまうものではないと決意を強くし、ある者は、どんな出来事が明日起ころうとも死に物狂いで投票所に出かけ、なんとか一票を行使しようと気持ちをたかぶらせていたのである。